

皮膚科のトリビア

219

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」、そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

本欄は、小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ、連載しています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第121回日本皮膚科学会総会から

令和4年6月2日

下肢虚血に対する HGFプラスミド治療

大阪大学が設立したベンチャー企業がつくった、重症下肢虚血に対する治療薬。一般名はベペルミノゲン ペルプラスミドで、商品名はコラテジェン[®] 筋注用4 mg。ヒト肝細胞増殖因子(hepatocytic growth factor : HGF)のcDNAを含むプラスミドDNAで、血管新生の作用がある。投与対象肢の虚血部位に対して1カ所あたり0.5 mgを8カ所に筋注する。4週間後に2回目の筋注を行う。潰瘍の面積、皮膚灌流圧、サーモグラフィーで改善が認められた。

一言コメント

「価格は1バイアル約60万円で、さすがに高価。適応症例の選択がむずかしそうだ。ベクターにプラスミドDNAを使った遺伝子治療薬は世界初らしい。」

●第121回日本皮膚科学会総会から

令和4年6月2日

CKが高値の丹毒患者の特徴

CKが経過中に正常上限(男性220 U/L、女性180 U/L)の10倍以上となった症例の検討。頻度は121例中5例で4%。40歳代から80歳代までの男性4例と70歳代の女性1例。5例中4例で高血圧症の合併があり、4例ともアンギオテンシンII受容体拮抗薬(ARB)を内服していた。CRPは9.54 mg/dLから

24.19 mg/dLと幅があり、CKとCRPは相関しなかった。局所の炎症が筋に波及した際にCKの上昇をきたすことがあるが、極めて高値の際には横紋筋融解症の被疑薬を内服していないか、チェックが必要である。

一言コメント

「もう1つ、熱発に伴う脱水症状も原因になっている可能性があるとのこと。CKは重症度のマーカーと考えがちだが、さまざまな要因があるようだ。」

●第121回日本皮膚科学会総会から

令和4年6月2日

費用対効果の算出方法

医薬品の費用対効果指標には増分費用効果比(incremental cost-effectiveness ratio : ICER)と呼ばれる指標を用いている。計算式は、新しい治療の費用マイナス従来の治療の費用(費用の増加分)を、新しい治療の効果マイナス従来の治療の効果(効果の増加分)で割ったもの。たとえば従来の治療が200万円かかり、その治療を受けた100人のうち、85人が有効だった。新規治療は1,000万円かかり、100人中90人が有効だったとすると、 $1,000\text{万} - 200\text{万} / 90 - 85 = 160\text{万} / \text{人}$ となる。ICERの値が小さいほど、費用対効果がよいということになる。

一言コメント

「なるほど。効果がさほど変わらないのに、金額が大きく上昇すれば、ICERが大きくなる。新規治療を導入する際の患者の説明にも使えそうである。」

●第121回日本皮膚科学会総会から

令和4年6月2日

皮膚悪性腫瘍の病勢と
血清LDの関連

悪性黒色腫、乳房外Paget病、有棘細胞癌、血管肉腫の血清LD値を検討した。悪性黒色腫と乳房外Paget病では病勢と血清LD値がよく相関し、悪性黒色腫の進行期の症例の最高値は2,891、乳房外Paget病では1,980だった。一方、有棘細胞癌では病勢が進行した症例の最高値が463、血管肉腫では620であり、後2者では、病勢評価に血清LD値が役に立たないことがわかった。

一言コメント

「逆に悪性黒色腫と乳房外Paget病では病勢評価に血清LD値が有用であることを知った。勉強になった。」

●第121回日本皮膚科学会総会から

令和4年6月2日

コミナティ®接種後に生じた体幹の
紅斑部にスパイク蛋白が証明された

80歳代の女性。左上腕にコミナティ®の2回目の接種を行った翌日から左前腕に紅斑を生じた。その後紅斑は体幹にも拡大し、3カ月間持続した。白血球数は12,000/ μ L、好酸球35%、IgE 941 IU/mL、TARC 21,000 pg/mL。体幹の紅斑から皮膚生検では、真皮中層までの血管周囲にリンパ球浸潤があった。免疫組織学的に真皮深層の血管内皮にCOVID-19スパイク蛋白を検出した。ステロイド内服で紅斑は軽快、好酸球数も正常化した。

一言コメント

「数カ月にわたって遷延した理由はなんだったのだろう。mRNAワクチンを打ったあと、いつごろまで蛋白がつくられ続けるのか、知りたいところである。」

●第121回日本皮膚科学会総会から

令和4年6月2日

強皮症の皮膚硬化に
ブロダルマブが有効

IL-17受容体Aに対する完全ヒト抗体で、すでに乾癬に対して使用されているブロダルマブの話題。中等症から重症の皮膚硬化を有する全身性強皮症患者を対象に、第III相臨床試験が日本で行われている。主要評価項目である、投与24週時点におけるmRSS（触診による皮膚硬化の指標）のベースラインからの変化量で、ブロダルマブ投与群はプラセボ群と比較して統計学的に有意なmRSSの低下が認められ、皮膚硬化に対する改善効果が検証された。

一言コメント

「トシリズマブとリツキシマブは聞いたことがあったが、IL-17受容体が有効とは知らなかった。そのうち適用拡大になるのだろうと思うが、対象の症例の選択がむずかしそうだ。」

●第121回日本皮膚科学会総会から

令和4年6月2日

甲状腺腫に一致して生じた
ヨード疹

50歳代の男性。バセドウ病に対して甲状腺全摘を予定されていたが、術前の応急的な治療としてヨウ化カリウム(KI)を内服した。10日目から、腫大した甲状腺に一致してその直上皮膚に境界明瞭な紅斑と小膿疱が出現した。KIによる限局的ヨード疹と診断。ステロイド外用で軽快した。KIのDLST陽性。KIの内服誘発では症状出現せず。甲状腺全摘後、紅斑を生じた頸部と上腕正常皮膚でパッチテストを施行したところ、頸部で陽性だった。甲状腺に蓄積したKIが皮下、真皮に及んで感作が成立したと考えた。

一言コメント

「貴重な症例で、発症機序の推察もユニークである。甲状腺と皮膚がどのようにつながっているのかはわからないが、“滲み出た”という感じなのだろうか。」